

チャレンジドや高齢者が、元気と誇りを持って働ける国に

社会福祉法人プロップ・ステーション
理事長 竹中ナミ
nami@prop.or.jp

プロップ・ステーション(略称プロップ)は、IT(情報技術)を活用してチャレンジド(challenged)の自立と社会参画、とくに就労の促進を目標に活動しています。

「チャレンジド」というのは最近の米語で、「神から挑戦という課題、あるいはチャンスを与えられた人」を意味し、障害をマイナスとのみ捉えるのではなく、障害を持つゆえに体験する様々な事象を自分自身のため、あるいは社会のためポジティブに生かして行こう、という想いを込めた呼称です。

私は、自分が重症心身障害を持つ娘を授かったことをきっかけに、この34年間多くのチャレンジドに出会い、ともに活動して来ましたが、娘が障害を持っていなければ私がこうした活動を始めることはなかったやろうな、と思うと、娘も私も「チャレンジド」といえると思います。

プロップでは、全国各地の在宅チャレンジドが、家族の介護を受けながらも、ITを活用し、「仕事人」を目指して勉強し、実力を身につけ、まだまだ少ない量ではあるものの在宅ワークに励んでいます。プロップの役割は、技術習得のセミナーを開催することと並行して、企業や行政から彼らの仕事を受注し、在宅でそれが行えるようコーディネートする重要な部分を担っています。重度のチャレンジドが「何が出来る人か」「どれくらい出来る人か」を知らない企業や行政機関が、不安感を持たずに仕事を発注するためには、きちんとしたコーディネート機関が介在し、その不安を取り除くことが必要です。また「チャレンジドゆえに安く使われる」ということのない、価格の打ち合わせなども重要な役割です。従って、プロップでは専従スタッフ以外に、様々な仕事のプロフェッショナルたちがボランティアとして参画し、チャレンジドの実力アップを支援し、また適切な評価を下さっています。産官政学民の広範な人たちが、それぞれの立場で、プロップの目指す方向にご協力を下さっており、大変ありがたいことだと思っています。

プロップのスローガンは「チャレンジドを納税者にできる日本」という「刺激的な」ものですが、私は「日本という国はいま、チャレンジドや高齢者の力を必要としている」という私なりの現実認識のもとに、あえてこういう「誤解を受けやすいスローガン」を掲げて活動を進めてきました。

長年、草の根で活動を展開してきたプロップですが、1998年9月、第2種社会福祉法人として厚生大臣認可を取得しました。既存の福祉観とは異なるスローガンを掲げ、なおかつコンピュータネットワークを活用するという、全く新しいタイプの活動が「社会福祉法人」として認可されたことに、時代の変化をしみじみ感じます。

高齢化と少子化が大変なスピードで同時進行している日本では、フルタイムで働ける人や残業もいとわれない、という人がどんどん少なくなっています。そうした社会にあってなお、福祉的財源(人とお金)を維持して行ける国であるためには、「一人でも多くの人々が自分の身の丈に合った働き方で支える」という構造に日本の社会システムが変化しないと持ちません。

「働く」あるいは「働くことで誰かの役に立ちたい」という気持ちは、人間ならではの素晴らしい感覚です。日本が、「チャレンジドや高齢者が、元気と誇りを持って働ける国」になって欲しい、と同時に私の娘のような「働く」という形で社会貢献できない人間も、尊厳を持って存在できる国にあって欲しい!

そういう国にするために、自分もプロップの活動を通じて役立ちたい、と切に思う毎日です。

プロップ・ステーションホームページ <http://www.prop.or.jp>
ご連絡、ご相談アドレス prop@prop.or.jp

Nami's Room

[HOME](#) > 「厚生労働省遠隔ITセミナー」が開催されました！

「厚生労働省遠隔ITセミナー」が開催されました！

「厚生労働省遠隔ITセミナー」が2月13日と14日の2日間に渡って実施され、無事成功裏に終了しました。長年、ICTを駆使して「チャレンジドの在宅ワークの推進」に取り組んできたプロップ・ステーションが、厚生労働省と、「遠隔教育システム」を開発した(株)NTTネオメイトのバックアップをいただき、仙台と京都に住む在宅チャレンジド・スタッフを講師として、東京の厚生労働省パソコンセミナールームに集まった官僚・企業人のみなさんにIT講習を行うという、日本で初めての事業でした。

それでは、当日の様様をナミねえがりレポート風にご紹介しましょう。ちょっと長いですけど、ぜひ最後まで読んでくださいね。



ナミねえ ご挨拶

開講を待つ会場では、

セミナー開催時刻を間近にひかえ、プロップ・ステーションの在宅スタッフたちが、会場からはるか離れた仙台と京都そして兵庫それぞれの自宅から、インターネットを通じて入念な打ち合わせを進め、それを会場スタッフがアシストします。大画面のディスプレイに写る講師たちの姿。彼らの音声だけが響く会場はいやがうえにも緊張感が漂います。

まず始めにナミねえよりご挨拶をさせていただきました。

「プロップ・ステーションは、16年前一般家庭にまだパソコンなど無かった時代から、重度の障害を持つ人でもIT技術を駆使することで社会に参画できるようにすることを目標に発足しました。そして現在、IT技術の進歩や、自立支援の方向への行政の変化などが後押しとなって、このような催しを実現できることとなりました。応援して下さった皆様に心から感謝申し上げます。今日は厚生労働省のセミナールームをお借りして、在宅の重度のチャレンジドが講師を務め、テレビ会議のシステムで皆様にITのセミナーを行うデモンストレーションをさせていただきます。この機会に、どんなに障害があっても努力をすれば、その方の出来ることを仕事にして行ける、勉強が出来る、あるいは講師として後進を育てることが出来る、そうした期待感をぜひ抱いていただきたいと思います。これだけたくさんの方にお集まりいただき、ほんとうにありがとうございました」

つづいて今回のセミナーの講師を務める、プロップ・ステーションが誇るチャレンジド・スタッフの紹介です。

メイン講師を務めるのは、初日は仙台的自宅から間藤裕也さん、2日目は京都から西村薫さん。そして東京の会場でサブ講師を務めるのは、神戸オフィスの岡本敏己さんと菊田能成(たかふさ)さん。また、みんなと協力して今回のセミナーの企画立案から教材作成まで、いわばプロデューサーの役割を果たしてくれたのが、尼崎在住の中内幸治さん。そして教材の素敵なイラストは大阪の安藤美紀さんが作成してくれました。みなさんの詳しい紹介は[こちら](#)でご覧下さいね。



間藤裕也さん@仙台



西村薫さん@京都

チャレンジド・スタッフの紹介はこちらで



今回のセミナー開催は、厚生労働省の皆さんのほんとうに熱い思いと応援で実現しました。事務次官の辻哲夫さんから、開講に先立ってご挨拶をいただきました。

「自立支援法が成立しましたが、障害のある方が持てる力を発揮してともに暮らせる社会こそ、心豊かなほんとうに良い社会だと思います。障害のある方々がお持ちのさまざまな能力を生かすことの出来る社会を創りたい、それがわたしたちの心の底からの願いです。本日西村さんと間藤さん、そして菊田さんと岡本さん、四人の方に講習をしていただきます。わたしたちはこのような素晴らしい能力をお持ちの方々に学び、ともに暮らす心豊かな社会になってほしい。こう願ってこの講習が成功することを祈り、このようなことを、ともに日本中に広げてゆきたいと思います。皆さん、どうぞよろしく申し上げます」(辻次官)



厚生労働省
辻哲夫 次官



国土交通省
安富正文 次官

厚生労働省のみならず、いま電ケ関の多くの省庁でこうした取り組みをバックアップしようという動きが出てきています。応援団の一人として国土交通省の安富正文事務次官にもご挨拶をいただきました。

「国土交通省も、障害を持った方が社会参加できるように、一番大きな問題である移動・交通問題を解決するため、バリアフリー法などで下支えしてゆきます」(安富次官)との心強いメッセージでした。

要説明をいただきました。

橋本さんの説明を簡単にまとめると、今回の遠隔講義には「テレビ会議システム」と「SBCシステム」という二つの技術が使われています。インターネット上にサーバーがあるので、遠隔でも授業が可能なんですね。そして、1. 映像・音声・資料を双方向でやり取りでき2. 受講者のパソコンを講師が遠隔で操作でき3. 講義に必要なOSや、今回でしたらパワー・ポイントといったソフトまでがサーバー上にあるので、受講者が用意しなくても良い、この3点が特徴です。「SBCシステム」とはサーバー・ベースド・コンピューティング・システムの略で、受講者のパソコンをすべてサーバー・コンピュータがインターネットを通じて一元的に管理するものだそうです。詳しくは[こちら](#)をご参照くださいね。

SBCシステムの説明はこちらで



NTTネオメイト
橋本秀俊さん

こうした最新の技術を使うことで実現した今日のセミナーです。私たちがいつも掲げているのが、「最新・最高の科学技術こそが最重度のチャレンジドの力までをも引き出すことが出来る」ということで、そうした意味から、私たちはこれまで最先端のIT関連企業のみなさんや通信事業者のみなさんと連携しながら活動してきました。今回はその成果を見ていただく場でもあるわけです。

講師の自己紹介に引き続き、いよいよ講習の始まりです。教室前方の2つの大スクリーンと受講者の机に並ぶパソコンには、同じ講習画面が表示されています。



前方の大スクリーンと受講者のパソコンには同じ画面が

講習に使われるテキストは全30ページに渡る大部なものです。このセミナーのためにプロップ・ステーションのスタッフによって半年間もかけて作成されたんですよ！このテキストを利用してPower Pointの操作法を学習しながら、『「遠隔講習」システムとチャレンジドの就労モデル』という5ページのプレゼンテーションを完成させるのが講習の目標です。

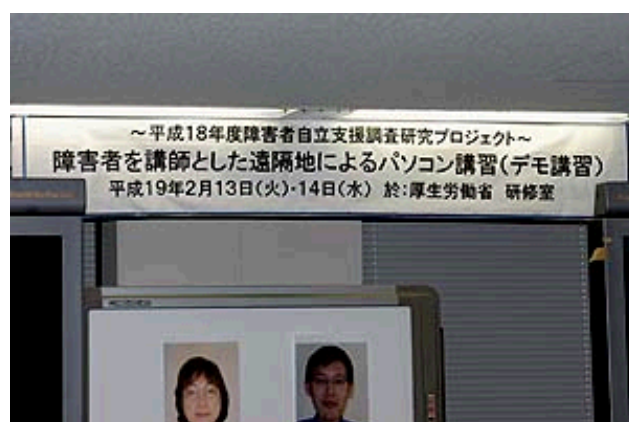
『「遠隔講習」システムとチャレンジドの就労モデル』完成版はこちらです



初日にメイン講師(テキストを使って指導する講師)を務めるのは、仙台の間藤さん。そしてサブ講師(メイン講師を補助して受講者の進み具合をチェックする)を務めるのが京都の西村さんです。二日目はそれぞれが逆の立場で指導に当たります。会場の受講者を後ろから直接見守るのは、神戸から駆けつけた岡本さんと菊田さんです。

講習時間は約一時間半が予定されています。また一日目の受講者は厚生労働省官僚・職員のみなさん、そして福祉関係者の方々、二日目は企業の雇用担当者の方々を中心となっています。

両名の講師は、教材作りから指導方針までを約半年かけて打ち合わせ、リハーサルを重ねてきただけに、講義を進める声からはとても落ち着いた様子が会場に伝わって、受講者も静かに、かつ熱心に耳を傾けます。講師はシャドー機能(SBCシステムの項参照)を利用して、遠隔で受講者のパソコン画面の状態を管理操作しているので、受講者が間違った操作をしたりするとサブ講師がすぐに遠隔で訂正の対応をしますから安心ですね。



会場に掲げられた

パワー・ポイントの起動です。

「～平成18年度障害者自立支援調査研究プロジェクト～ 障害者を講師とした遠隔地によるパソコン講習(デモ講習)」の文字

講習画面は本来のパソコン画面と、それと同じSBCシステムの仮想画面に分かれており、仮想画面のスタートボタンで起動させますが、使い勝手は変わらないようです。講師からパワー・ポイントの画面入力方法が一通り説明されました。

教材を利用しながら、実際のプレゼンテーションの作成に入ります。時間が限られているので、ある程度の文字情報などはあらかじめ用意されており、必要なデザインテンプレートを利用してタイトルなどのテキストを入力します。受講者の進み具合は、常にサブ講師がチェックしており、講師がそばにいるのと全く変わらない雰囲気です。



熱心に講義に聞き入る受講者の皆さん

グラフの作成！

つづいてグラフの作成にチャレンジです。エクセルで作成した資料をグラフで表示させる操作を学びます。パワー・ポイントのインポート機能を使って入力された情報を元に順調にグラフが出来上がってゆきました。

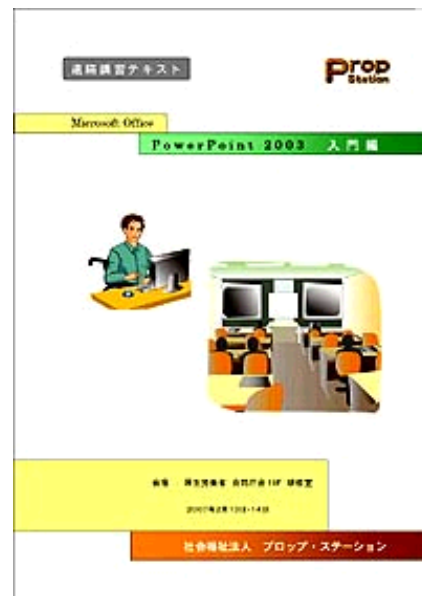
受講者が誤った操作をし、遠隔のサブ講師がすぐに見つけ出して連絡し、メイン講師が遠隔操作で受講者のパソコンを修正する光景も見られました。ポイントが独り

でに動くので、まるで肩越しに手をのばして訂正の操作をしているような雰囲気ですね。

次のステップは、箇条書きの追加と図の挿入です。イラストの挿入ではマイピクチャに保存されたデータを選択しますが、このイラストは大阪のプロの漫画家、安藤美紀さんが作成したものです。つづいて図表の作成ですが、今回はプレゼンテーションの目的にあわせてピラミッド型が選ばれ、要素やスタイルを入力してゆきます。戸惑っている受講者には、会場に控えたチャレンジ講師がアシストしますが、その機会も少なくないへん順調に講義は進んでゆきます。

講習の最後にはアニメーションの設定を学びました。

アニメーションの利用は視覚に訴える、より効果的なプレゼンテーションを行うのに不可欠なものです。講習ではアニメーションを一括して設定する方法を学びました。最後には無事に受講者の各パソコンから選択したアニメーションが再生されました。クリックすることで、その都度アニメーションを表示することも出来るし、アニメーションからハイパーリンクを利用して、別のサイトに移動することも可能です。ほんとうに便利なものですね！



今回使われた全30ページの
テキスト 表紙
(クリックすると目次へ)

作成したプレゼンテーション・ファイルを保存して講習は無事終了しました。講師からは「パワーポイントには、今日学んだ以外にもさまざまな機能がありますから、ぜひこれからも頑張ってください」とのメッセージがありました。

西村、間藤、両講師とも最後までほんとうに落ち着いて、とても丁寧で分かりやすい講義でした。

講習が終わって受講者や取材陣からはたくさんの質問やご意見が寄せられました。

「遠隔講師からは、受講者の実際のパソコン画面がどのように見えているのか」「講師の通信回線は何か」(両講師ともケーブルテレビ)「携帯電話での利用は可能か」「生徒が自宅にいる場合でも講習可能か」「最高で何人程度の受講者に対応可能か」「オンラインの講師の経験はあったのか、またやってみての感想は」「SBCシステムを障害者が利用するのは初めてか」「このシステムは商品化されるのか」「講師から受講者の動きの詳細が窺えるのか」「複数の受講者をきめ細かく指導するノウハウは」「企業どうしのシステムの共同利用は可能か」「大人数での利用を出来るようにしてほしい」「こうした活動が全国にひろがるよう、国も協力してほしい」etc
それぞれの質問やご意見に、ナミねえや技術担当者、そして事務局でセミナーの指揮を取った阿波雅以さんも交えて対応しました。



受講者からはご意見もよせられました

また、講習終了後には出席者の方々からアンケートも取らせていただきましたので、まとまった時点であらためてご報告したいとも思っています。

会場からのご意見に、ナミねえも身の引き締まる思いが。

福祉関係の出席者の方からは、実際にインターネットを利用して講習をした際の限界点や、同じようなシステムと比べて、今回は遠隔講師が画面を通じて直接受講者のパソコンを操作できることを高く評価する声がありました。そして実際に安価で利用出来るようになって欲しいとの希望が強く出されました。また、講師がとても素晴らしかったとのご評価もいただきました。

ナミねえは、今回のような講習が近い将来には日常的に実現することを願っているのですが、こうした質問や希望を技術者の方々为抓手り受け止めて、技術の進歩につなげていって

欲しいと心から思いました。技術者の方は「不可能に挑戦したい」という技術者魂をお持ちの方が多と思うので、きっと実現しますよねっ！

そして、企業がこうしたことを実現してゆくためには、開発に見合った需要がなくてはいけないわけで、これからは技術を必要とする私たち自身がみんなで力をあわせてシェアしながら、システムを発展させていくということが必要なのだと思います。

また養護教育の現場での、障害者のこういった働き方(インターネットを利用した在宅就業)の周知を求める声もありました。ナミねえは今、省庁横断での活動に力を入れているところでもあり、まさにこうした問題を考えるにはひとつの省庁だけでは不可能なわけで、これからますます頑張っってゆかなければと身の引き締まる思いがいたしました。

第一日目の最後、受講者のみなさんからの質問が終わったあと、厚生労働省の就労支援専門官、箕輪優子さんからご挨拶をいただきました。

箕輪さんは、民間から障害者雇用の分野でのスペシャリストとして厚生労働省に入られた方です。今回のセミナー実現にあたって最初から大変なご尽力をいただきました。「重度の障害者の中でも、このような働ける方からの声なかなか届いてこないということに課題を感じます。障害者就労支援担当者として、いろいろな方向で可能性を見つけ多様な働き方を考えてゆきたいと思っています。このようなセミナーを通じて、雇用する側から、研修を受ける、アウトソーシングするといったさまざまな可能性について情報をいただきたく、また皆様からの情報発信もよろしくお願いいたします」(箕輪専門官)



厚生労働省
箕輪優子 専門官



にこやかに語る
厚生労働省 中村秀一 社会・援護局長
(長)

第二日には厚生労働省の社会・援護局長の中村秀一さんにもご挨拶をいただきました。

「竹中さんのお話の通り、IT技術の進歩がチャレンジドにとって非常に良い状況になって来ています。わたしたちも重度の障害がある方が、普通に地域で暮らせる社会創りをせいはい担ってゆきたいと思っています。個人的な感想では、アニメーションがあんなに簡単に入れることが出来るんだなあと分かりまして、次回からわたしのパワーポイントは“動く”ようになります(笑)。ありがとうございました」(中村局長)

二日間にわたった講習もすべて無事に終了しました。

最後に、今回の企画を実現するために力をお貸しいただいたすべての方に、あらためて心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

そしてこの成功は、何よりチャレンジド自身がこれまで不断の努力をつづけてきたからこそもたらされたもので、ナミねえはスタッフみんなに惜しみない拍手を送りこのレポートを終えたいと思います。ほんとうにご苦労さまでした。そしてまた共に頑張りましょう！

<リポート by ナミねえ>



二日目の講習が終り、在宅講師と会場のみなさんがそろっての記念撮影です

今回のセミナーの様子が[朝日新聞](#)と[東京新聞](#)の記事で取り上げられました。毎日新聞のナミねえの連載コラム「[年年歳歳](#)」でも紹介しています。[クリップボード](#)をご参照下さい。
またNHKの全国ニュース([NHKニュースクリップ 2月13日の項参照](#))でも放映されるなどメディアの関心も高く、多くの国民の皆さんに「すでにこのようなことが可能な時代が来た」と知って戴くことが出来たのではないのでしょうか。「ITの力でチャレンジドにさらなる就労の可能性を拓く」大きな一歩になったと、ナミねえは確信しています。



セミナー初日の取材風景

< by ナミねえ >

ナミねえとプロップ・ステーションによる「チャレンジドの就業支援」への取り組みの一例をご紹介します(詳細はそれぞれの項目をクリックしてご覧下さいね)

[厚生労働省「障害者の在宅就業に関する研究会」委員として、報告書「多様な働き方による職業的自立をめざして」のとりまとめに関わる。](#)

[「障害者の在宅就業に関する研究会」において、支援機関による支援の現状\(支援機関ヒアリング第一回\)を報告](#)

[内閣府中央障害者施策推進協議会委員としての活動](#)

[福祉就労の場を本当の働く場に！「チャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト」の推進](#)

[「障害者就労支援京都府ITスキルアップ研修」の実施\(京都府委託事業\) etc.](#)

[HOME](#) > 「厚生労働省遠隔ITセミナー」が開催されました！

copyright(c) 2006 Nami's Room

Nami's Room

[HOME](#) > [「厚生労働省遠隔ITセミナー」が開催されました!](#) > 厚生労働省遠隔ITセミナー・スタッフ紹介

【厚生労働省遠隔ITセミナー・スタッフ紹介】

<在宅講師プロフィール>



西村 薫(にしむらかおる)

居住地:京都市 年齢:54歳
障害名:関節リウマチ

大学卒業後、会社勤務時代に発病。手術のため何度か入院生活を送り、自宅療養中にプロップのオンラインセミナー「翻訳者養成講座」を受講後、語学力を生かし、海外ゲストとの対談ビデオや資料の翻訳行う。大阪府教育委員会の委託によるリンク集作成、Word Excel PowerPoint など、Microsoft Office の主要なアプリケーションの活用テキスト作成、eラーニングセミナー用教材作成を行い、現在、市町村合併の調査資料作成中。



間藤裕也(まとうゆうや)

居住地:仙台市 年齢:28歳
障害名:クーゲルベルク・ウェランダー病

高校卒業後、プロップのオンラインセミナー(Visual Basic)を受講後、宮城県で行われた宮城国体で、高校生の作成したニュース記事のWebへのアップを行う。大阪府教育委員会の委託によるリンク集作成、Word Excel PowerPoint など、Microsoft Office の主要なアプリケーションの活用テキスト作成、eラーニングセミナー用教材作成を行い、現在、市町村合併の調査資料作成中。

両者とも、独学やプロップ・ステーションでスキルを研鑽し、プロップ・ステーションに遠隔スタッフとして就労しています。現在、他のチャレンジドのリーダーとして、仕事を振り分け、成果チェックを行うなど、責任者として、また良き相談者としても、活躍中です。



中内幸治 (なかうちこうじ)

居住地: 尼崎市 年齢: 49歳

障害名: 進行性筋ジストロフィー ベッカー型

大学卒業後、10数年ほどSEとして会社勤務。病気の進行により、会社勤務時代の最後の1~2年は車椅子を使用。退職後は個人受けでの仕事を行う。その後、プロップのオンラインセミナー (Microsoft Access) を受講。幾つかのプロジェクトを経て、プロップの在宅スタッフとなる。大阪府教育委員会の委託による「府内盲聾養護学校のICT活用支援プロジェクト」にて、各校の実態調査、リンク集作成、各種テキスト作成。企業様のご依頼にて、市町村合併などの調査資料作成。その後、半年ほどの入院があり、現在は家庭事情・体調管理の難しさより、スタッフを退き、プロップの協力者となる。

在宅講師・スタッフと打ち合わせを進めながら、教材の作成やセミナーの企画・進行のとりまとめ役を果たした、今回のセミナーのいわばプロデューサー的存在。

<会場サブ講師プロフィール>



岡本敏己 (おかもととしみ)

居住地: 大阪府高槻市 年齢: 60歳

障害名: ポリオ (脊髄性小児マヒ)

和歌山県の海南市で生まれました。中学では陸上部に所属し、本来は考えるより体を動かす方が向いているのです。13歳でポリオ (脊髄性小児マヒ) に罹り両手がブラブラで動きません。でも両足は結構器用で、日常生活にあまり不自由はしていません (一人暮らししてまんねん)。もちろんマウスの操作もそこそそ早いですよ。下手ですがスキーもしますし水泳も1キロ位はおよげます。(実は障害者になる前はスキーも水泳も駄目でした。不思議なもんですなー)

プロップとの出会いは、私の今所属している作業所にパソコン習えへんかと回覧板が回ってきて、誰か行けよと言うことになり、他の皆が逃げて、私にお鉢が回ってきたという次第です。何ともまあいいかげんな出会いだったのですが、何かはまってしまい、プロップ第一期生の身が今は講師みたいなことをしてま。一番良かった点は楽しく習えた点です。そして何よりの収穫は一生楽しめそして学べる事を得たことです。

わたしの願いは皆にコンピュータに親んでもらい、あわよくばそれで金儲けをしてもらいたい。そのようになってもらう手助けをしたい、と思ってます。私でもそこそこパソコンが扱えるということ自体、皆に「やれそうや」という自信を持たせることが出来る。そんな気がします。

(本人談)



菊田能成(きくたなかつさ)

居住地:大阪府豊中市 年齢:41歳
障害名:てんかん

4歳のときに発病。34歳のときにプロップの「グラフィック初級セミナー」を受講。プロップのオリジナルCD-ROM制作を手伝いながら「グラフィック中級セミナー」を受講後、プロップ神戸ネットワークセンターのスタッフとして、機関紙制作・グラフィックセミナー講師・ホームページ制作などを担当。現在は、厚生労働省自律移動支援プロジェクト ホームページ制作などグラフィック関係の仕事を担当。

普段はプロップ・ステーション神戸オフィスで活躍する二人ですが、今回のセミナーでは会場でアシストするサブ講師として駆けつけてくれました。

<教材イラスト作成担当者プロフィール>



安藤美紀(あんどうみき)

居住地:大阪府
障害名:重度聴覚障害

聴覚障害者ママが働ける場を作ることを目的にMAMIEを2006年に設立。MAMIEのリーダーとしてスタッフを引っ張るつもりがミキティがスタッフの足を引っ張りながら仕事をさせて頂いております。チャリティーショップ「くるりん」とまちづくり福祉推進ネットとネットワークを中心に今日もMAMIEは頑張っております。障害者向けのパソコン教室の講師、ウェブデザイナー、手話講師、障害者に関する漫画を描く聴覚障害者の漫画家です。活動面は「フランカー」「いくお～る」「働く広場」などの福祉関係の雑誌の漫画をセミプロで描いてきました。現在は社会福祉法人プロップ・ステーションの理事長竹中ナミの著者「ラッキーウーマン」の漫画化へ向けて活動中。

安藤さんは、今回のセミナーの教材に使われた素敵なイラストを作成してくれました。NHK教育の番組「きらっといきる」でも二度にわたって紹介されたので、ご存知の方も多いと思います。

<事務局スタッフ>



阿波雅以

阿波雅以 (あわまさい)

プロップ東京オフィス担当者として、厚労省とチャレンジド講師たち、ネオメイト技術者とのパイプ役を努め、セミナー全体を指揮。残念ながらこの仕事を最後に、夫の転勤に伴い名古屋へ転居。

優秀なスタッフを失って、めちゃ寂しいけど、名古屋でも活躍してね:ナミねえ(談)



栗林浩(左) 竹中宏晃(右)

栗林 浩 (くりばやしひろし)

プロップの、海外組織との交流を担当する翻訳ボランティア・スタッフ。今回のセミナーでは受付業務をサポート。

竹中宏晃 (たけなかひろあき)

本年1月プロップ・ステーション事務局長に就任。東京オフィス専従。

[HOME](#) > [「厚生労働省遠隔ITセミナー」が開催されました!](#) > [厚生労働省遠隔ITセミナー・スタッフ紹介](#)

月刊NEW MEDIA 2005年11月号より転載

「第10回チャレンジド・ジャパン・フォーラム2005

国際会議 in HYOGO/KOBE」報告

10年目を迎えたCJF、 「ユニバーサル社会」づくりは 理念から実践の段階へ



すべての人々が持てる力を発揮して支え合う「ユニバーサル社会」づくりを提唱する「チャレンジド・ジャパン・フォーラム」(CJF)の第10回大会が、阪神・淡路大震災10周年を迎えた兵庫県神戸市で去る8月に開催された。国内外から、また産・学・官・政の各界やNPO、障害を持つ当事者から、さまざまな実践報告や提言が行われた。(報告:中和正彦・ジャーナリスト)



大会の最後に「宣言」を発表



会場は神戸ファッションマート1Fアトリウム

阪神・淡路大震災で生まれた 「ユニバーサル社会」意識

「阪神・淡路大震災からの復旧・復興は、若い人も年配者も、障害のある人もそうでない人も、すべての人々が努力して支え合うことによって初めて実現しました。そのような意味で、震災10年のこの地で10回目のCJFが開催されることを大変意義深く感じます」

井戸敏三・兵庫県知事は、開会の挨拶の中でそう述べ、兵庫・神戸の地からユニバーサル社会づくりがいっそう進展することに期待を寄せた。

CJFは10年前、自立しようとする障害者を「チャレンジド」(挑戦すべき使命やチャンスを与えられた人という意味を持つ米語)と呼び、チャレンジドが社会を支える一員になれる社会づくりを目指してスタートした。やがて、女性、高齢者、被災者、さらには少子高齢社会への備えを待たないで迫られているすべての日本

人も「チャレンジド」であると規定し、「すべての人が持てる力を発揮して支え合うユニバーサル社会」を目指す活動へと発展した。

共感を寄せて壇上に立つ顔ぶれは年々豪華になり、今回は閣僚2名、国会議員2名、知事3名、市長3名、海外ゲスト4名を含めて、産・学・官・民の第一線で活躍する人々や障害当事者が集った。その中に、CJFに集う人々に大きな影響を与えた米国女性の姿もあった。米国国防総省コンピュータ電子調整プログラム(CAP)ディレクターのダイナー・コーエンさんだ。



「ユニバーサル基本法制定にむけて」を議論したメンバー。写真後列左から坂本由紀子・参議院議員、大石久和・東京大学大学院情報学環教授、ダイナー・コーエン・米国国防総省CAP理事長、竹中ナミ・プロップステーション理事長、山本かなえ・参議院議員、清原桂子・兵庫県理事、前列左からスポンタム モンコンサウディ・タイ国パタヤ市レデンプトリスト障害者職業訓練学校長、マイケル・ウインター・米国連邦公共交通局市民権室長



基調講演「Let's be proud!」をテーマに話すダイナー・コーエン・米国国防総省CAP理事長



「ユニバーサル社会創造のムーブメントを発信しよう」をテーマに『自律移動支援プロジェクト』を話し合った写真右から坂村健・東京大学大学院情報学環教授(自律移動支援プロジェクト委員長)、マイケル・ウインター・ADA制定に寄与した連邦公共交通局市民権室長、北側一雄・国土交通大臣(当時)

究極の目標はすべての人が 誇りを持って生きること

CAPは国防総省のみならず、他省庁の障害を持つ職員のIT支援も一手に担っている組織。CJFを主宰する社会福祉法人プロップステーションの竹中ナミ理事長は、1999年にコーエンさんに初対面した際に「どうして国防総省がそんなにチャ

レンジド就労支援に熱心なのか」と尋ねたところ、次のような答えが返ってきたという。

「すべての国民が誇りを持って生きられるようにすることが、国防の第一歩ですから」

感銘を受けた竹中さんは、2000年のCJFにコーエンさんを招聘。その講演は浅野史郎・宮城県知事らCJFの支持者たちにも広く感銘を与え、「すべての人々が誇りを持って生きられるように」がチャレンジド就労支援やユニバーサル社会づくりの究極の目標として共有されるようになった。

コーエンさんは今回、雇用・交通・通信など、あらゆる面での障害者差別を禁じた「障害を持つ米国人法」(ADA)が制定されての15年間で、米国社会がどう変わったかについて語った。

加齢によって身体機能に障害が出て、また、イラクやアフガニスタンから障害を負って帰還しても、本人の意欲さえあれば支援機器などを活用した新たな活躍ができる社会環境が整ったという。そして、実際に多くの障害を持つ人々が社会に貢献してきたという。

自らも難病による内部障害を持ちながら活躍してきたコーエンさんは、「私たちは障害を持つ米国人であることに誇りを持っている」と講演を結び、大きな拍手を浴びた。



初日の夜に行われたコミュニケーションパーティ
に登場した「あぶあぶあコンサート」



総合司会は初日を黒岩祐治・フジTV
「報道2001」キャスターと竹中ナミで、2
日目を安延申・国際IT財団副理事長
(ウッドランド社長)と竹中ナミ

ついに動き始めた 国レベルの取り組み

日本側も、コーエンさんが前回招かれた5年前に比べると、国政レベルで大きく動き始めていることが感じられる内容だった。

例えば、坂本由紀子・参議院議員ら与党の国会議員有志は、ADAに学びなが

ら日本にマッチした「ユニバーサル社会」形成のための基本法を制定しようと、「与党ユニバーサル社会形成促進プロジェクトチーム」(野田聖子座長)を結成。今年5月にはCAPも含めた米国視察を行った。坂本議員は、その時の見聞からこう決意を語った。

「米国では、障害がある子も皆と同じ学校で学んで、大学も行きたければ同じように行けます。きめ細かな就学支援の手だてが取られています。日本は10年どころか30年遅れているという思いを強くしました。日本の場合は盲学校・ろう学校・養護学校で特別な教育をすることになっています。一見親切なようですが、普段接する機会がなくなるので、大人になって会っても心のバリアがなかなか取り除けません。教育制度の抜本的な見直しが必要と思いました」

就労や社会参加に関しては、すでに抜本的な見直しをはかった法案の是非が国会で問われた。先の国会で成立した改正障害者雇用促進法と、廃案になった障害者自立支援法である。

後者は、障害者に自己負担を求める点に猛烈な反対が巻き起こり、その面ばかり注目されてしまった。しかし、この2つの法案は、働く意欲も潜在能力もあるのに各種のバリアのために働けない人を支援して自立を達成してもらうのが共通の目的であり、自立を阻む過酷な負担を課そうというものではない。

尾辻秀久・厚生労働大臣(当時)は、「(保護から自立支援へと)障害者施策の考え方を大きく変える第一歩にしようということで頑張った法案です。ここで頓挫してはいけない。次の国会が開かれたら、もう一度国会に出して成立させていただきたい」と強く理解を求めた。

自立しようとするチャレンジドにとっては、交通などの物理環境にあるバリアも大きな問題。この点については、北側一雄・国土交通大臣(当時)が駆け付け、ひとつの方向性を示した。

「旧建設省が、公共建築物を高齢者・障害者にも使いやすいものにするよう定めたハートビル法を作りました。旧運輸省は、交通バリアフリー法を作りました。その後、両省は国土交通省に統合されました。そこで今、2つの法律も一体にして、まち全体としてのバリアフリーを強力に推進できるようにしたいと考えています。来年の通常国会に提出したいと思っています」

また、大臣は同省が実証実験中の新しい情報インフラ「自律移動支援プロジェクト」を、同プロジェクト委員長の坂村健・東大大学院教授とともに紹介した。

これは、携帯端末を持って移動すると、町中至る所に設置されたICタグから案内情報を受け取れるというシステムで、白杖を突いて歩く視覚障害者や外国人の道案内も想定している。

国土交通省は、大臣のほかに事務次官や政策統括官も出席してこのプロジェクトのPRに務め、フォーラム参加者を対象にした無料体験ツアーも行うという熱の入れようだった。



小泉首相もビデオメッセージ。「チャレンジドの波を起こそう、ね、ナミさん」



グスタフ・ストランデル・スウェーデン福祉研究所
長と話す貝谷嘉洋・日本バリアフリー協会代表



「『障害者』から『チャレンジド』へ」を話し合った写真右から大平
光代・大阪市助役、須藤 修・東京大学大学院情報学環教授
(CJF座長)、尾辻秀久・厚生労働大臣(当時)、坂本由紀子・参
議院議員

能力あるチャレンジドが 当たり前前要職に就くまで

前出・コーエンさんとともに米国から招かれた車いすのゲストがいた。米国連邦公共交通局市民権室長のマイケル・ウインターさん。米国の変化を自らの人生に重ねて、次のように語った。

「私は27歳まで、電車にもバスにも乗れませんでした。その私がいま、公共交通が障害を持った人にもきちんと利用できるかどうかを監督する仕事に就いています。興味深い展開だと思います。ちなみに、15年前のADA制定以前は15%のバスしか車いすで乗れませんでした。今は9割が乗れます。しかも、それは高齢者や一般市民にも乗れやすいものになっています」

第10回の記念大会の内容は盛りだくさんだった。前述したほかに、自宅や施設でパソコンやインターネットを武器にして働くチャレンジドの事例発表、企業のチャレンジド・テレワーク事例発表、「ユニバーサル社会」の理念に賛同して集まった知事や市長によるトークセッションなどなど……。

だが、ウインターさんやコーエンさんのように大きな組織の中で要職に就いて活躍する日本人チャレンジドの姿は、まだなかった。そのようなチャレンジドが珍しくなくなるまで、CJFの問題意義はあり続けるのかもしれない。

会場で国交省「自律移動支援プロジェクト」
をデモ



このコミュニケーターで情報
を表示し、聞き取る

[戻る](#)



[TOPページへ](#)